

ルターの宗教改革精神と心の回復

マルテ・リノ 著・寺園喜基 訳

Luthers reformatorisches Denken und dessen befreiende Wirkung für den Menschen

Malte Rhinow・Yoshiki Terazono

昨年は、伝統的に宗教改革の開始とされるマルティン・ルターの95箇条提題の発表から500年目を迎えたのを機会に、宗教改革500年祭が祝われました。宗教改革を100年毎に祝うのは今度で4度目になります。これまでの祝いと違って、今回の記念祭は世界規模で超教派になされました。カトリック教会でさえこの祝いに参加したのです。ですから、明確になったことですが、16世紀の宗教改革はドイツやヨーロッパに限られた出来事ではなく、これは全てのキリスト教界、否、全世界をさえ変革した出来事なのです。

私は第1にルターの生涯について、第2に宗教改革の精神について述べて、その後で第3としてルターの宗教改革は私たちの生活にとって如何なる意味があるかを問題にしたいと思います。

1 マルティン・ルターの生涯

マルティン・ルターは1483年11月10日アイスレーベンで生まれました。トゥールの聖マルティンの日と言われた次の日に、マルティンの名で洗礼を授けられました。間もなく両親は近くのマンスフェルドに移住し、ルターはそこで成長しました。そこで父親は銅の鉱山を所有し、工場長として大変裕福になりました。ですから両親はマルティンを良い学校と大学へ通わせることが出来たのです。マンスフェルドの学校（1490/91年～1497年）を終えて、ルターは1497年から1501年の間にマグデブルグとアイゼナッハのラテン語学校に通いました。1501年からエアフルト大学で学び、1505年に学芸修士号を得て卒業しました。

中世後期にしばしば見られたことですが、ルターも死と死後に起こることに不安を持っていました。当時の人々と同じように、神は最後の審判において人間を裁かれると確信していました。罪を犯し、不正な人生をおくった人は、直ちに永遠に地獄の火で焼き尽くされることはないとしても、煉獄で罪の償いを受けるのです。天国に行きたいと願う者は、従って善い働きをしなくてはなりません。善い働きというのは、例えばミサに参加すること、聖地訪問や巡礼の旅をすること、祈りを捧げたり、教会や困っている人々に喜捨をしたりすることなど

です。特別に善い働きとは、世俗的生活を捨てて、修道院に入ることでした。

修士号を得て後、夏学期には、ルターは父親の願い通りにエアフルト大学で法学の勉強を始めました。自宅帰省後の1505年7月2日に、エアフルト近郊のシュトッテンハイムで突然雷雨に見舞われました。雷が近くに落ちたとき、彼はそれを神の警告だと受け取り、不安に駆られて「聖アンナ様、お助けください、私は修道僧になります」と叫びました（注1）。聖アンナはマリアの母であり、鉱山労働者たちの守護聖人なのだったのです。

ルターは修道僧になるという誓約をたて、この約束を守ろうと法学の勉強を中止しました。そして1505年7月17日に、父の思いに反してエアフルトにある修道院に入り、アウグスティノ会修道僧の一員となりました。彼は大変熱心に修道院生活と取組み、神学の研究に没頭しました。2年もしない内に1507年4月に司祭に叙階されました。

毎日の懺悔の苦行にもかかわらず、ルターは神の前での不安、最後の審判への不安から解放されることはありませんでした。告解も、告解祭司のヨハン・フォン・シュタウピッツが多すぎると思うほど頻繁にしたにもかかわらず、不安が消えることはありませんでした。ルターは、自分の犯した罪を全て知りかつ告白したのかどうか、自分では確かでない、ということを知っていました。罪の赦しの前提は、諸々の自分の罪を懺悔すること、つまり一つ一つ数え上げることでした。そしてカトリック教会の教えでは必要なことは、悔い改めが真実であること、つまり懺悔が神への愛から起こり、罰への不安からのみではないということでした。しかしながらルターは自分に嘘をつくことができません。良心が繊細だったのです。不安がいつも伴っていることを知っていました。ですから、教会のほどこす免訴が罪の赦しに本当に効力があるのかどうか、彼には確信がありませんでした。神に対する不安は残りました。

ルターの告解祭司（シュタウピッツ）は同時にアウグスティノ修道会の司教総代理でもありました。彼は1508年にルターをウィッテンベルクの修道院へ送り、その大学で神学を研究するよう推薦しました。ルターはすでに1509年3月にロイコレア（ヴィッテンベルク大学が

あった町)で聖書学学士号を、その数か月後には文章学学士号を取得しました。シュタウピッツはルターを1511年にローマへ送りました。ルターは深い印象を与えられましたが、しかしまた多くの弊害があることに困惑もしました。

1512年フリードリッヒ賢王はルターを10年前にやっと設立されたばかりのヴィッテンベルク大学に招聘し、彼に聖書神学の教授ポストを与えました。ルターは10月には神学博士の学位を得ました。彼は教授ポストを生涯にわたって保持しました。ルターは詩編とパウロ書簡についての講義から始めました。

聖書研究を通してルターによる義認論の再発見ということが起こりました。これが通常「宗教改革の転換点」と呼ばれます。何処でこれが発見されたかは分かっていますが、それはヴィッテンベルクのアウグスティノ修道院です(注2)。ルターはこの宗教改革上の発見を後になって突然の発見であって、トイレで起こったと書いています(注3)。いつこの発見がなされたのかということは、はっきりしません。特に、ルター自身が書いているように突然のひらめきによるのか、それとも思索過程で徐々に起こったのかは、不明です。宗教改革上の発見については非常に異なった描写がなされています。仮設では1511年と1518年の間であろうと言われています。

ルターは何を発見したのでしょうか。

本質的な発見は次の点にあります。すなわち、神は最後の審判のときに、スコラ神学が主張するように人間から正義を求めるのではなく、イエス・キリストによって罪人なる人間から罪を赦すということです。正義とは人間が神に対して行わねばならないものではなくて、神が人間に与えるものなのです。人間は罪人であり、そのようなものとして死に値します。しかし、イエスは、ご自身は罪がないのに、死の判決を身に負われました。その死によって罪が赦され、それによって罪人は解放されたのです。人間は罪人ですが、しかし生きることが許されるのです。神は、「あなたには罪がない」とは言わず、「あなたは罪人であるが、わたしはあなたを赦す」と言われるのです。罪人が義とされること(義認)は賜物、恵みであって、わたしたちはイエス・キリストに感謝するほかありません。これが新約聖書の喜ばしい使信です。神は罪人を愛し、彼を赦すのです。神はあるがままの人間を引き受け、人間が出来もしないようなことは何も要求しません。

宗教改革上の発見はルター自身の講義に変化をもたらしました。1515年以後、ルターは新約聖書に関する解釈学を行うのにスコラ神学者たちの影響を受けることはだんだん少なくなり、古代教父たちに従うようになりました。彼らは義認論をまだ知っていたのです。聖書に関するルターの新しい理解はロイコレアにおいて貫徹されました(注5)。彼の同僚たちもまたスコラ神学について講義はせず、教父たちについて講義しました。同時にル

ターは聖書解釈を聖書に内在する尺度に従って展開しました。彼は聖書のテキストを他の聖書のテキストや聖書証言全体と比較しました。ロイコレアの教授たちは、聖書が神学議論の標準的尺度であると理解し始めました。1516年以後、ルターとスパラチンは大学改革にのりだしました。その結果、古典ヘブライ語と古典ギリシャ語の2つの講座が設けられました。ギリシャ語講座を1518年にフィリップ・メランヒトンが受け持ち、ヘブライ語のために1521年からマテウス・アウロガルスが教えました。その代り1520年の半ばにスコラ神学の2つの講座が閉鎖されました(注6)。

ロイコレアにおける1515/16年以來のこの大学内の改革は大きな対立もなく、また外から気づかれることもなく進行しました。カトリックの司教たちは他の出来事によってようやくルターに注目するようになりました。それは1517年の贖宥状・免罪符に反対するルターの95箇条提題です。これが大規模な対立を生み出し、中世の土台を揺るがし、そして全世界を変えたのです。

義認論はルターを否応もなく教会との対立へと引き込みました。それは当時の教会は、罪人に対する神の愛の福音を押さえつけ、その代り人々を最後の審判に対する不安へと駆り立て、それによって良い商売が起こされたからです。対立は免罪符問題に火をつけました。

免罪符とはどういうものなのでしょうか。

カトリック教会は死後の人間の運命についてこう教えました。キリスト者は、彼らが天国へ行く前に煉獄においてその罪をあがなわねばなりません。罪に対する罰は大変なものです。多くの人々は、煉獄で数百年から数千年を罪のために費やすことを念頭に置かねばなりません。勿論これは人々を大きな不安に落しいます。ですから、罪の赦しを求め罪の数を減らしてもらうために、ほとんどの人が規則正しく告解をし、ミサに参加しました。

ですから、教会が人々に免罪符を提供することは、人々にとっては大きな慰めだったのです。確かに公式の教えでは免罪符で罪は無くなりませんが、しかし罪に対する罰は部分的にせよ全体的にせよ軽減されるのです。免罪には様々な形がありましたし、カトリック教会では幾つかの形が今日まで残っています。例えば、聖年におけるローマ訪問は一般的な罪の赦しになります(注7)。巡礼にも免罪符が与えられました。特に厚かましいのは、金銭による免罪符の売買です。その際、教会は買った人に刑罰の軽減を約束したのみでなく、煉獄に留まっている死者にも約束したのです。有名な免罪符説教者ヨハン・テツェルは、「お金が箱の中でチャリンと鳴るや否や、魂は天国へ飛び立つ」と表現しました。免罪符の販売は莫大な収益を上げました。免罪符は非常に高いものでしたが、しかし人々はそのようにして煉獄の不安から平安を取り戻したので、免罪符は大変好評でした。そうして教会は大変お金を儲けました。

1517年の免罪符には具体的な理由がありました。大司教アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクは、すでに所有している二つの司教区に加えて、なお選帝侯の爵位が付いているマインの大司教になろうとしていました。当時の全ローマ帝国には7人の選帝侯がいました。この選帝侯たちが皇帝を選んでいました。もちろん、最高の権力を意味しています。アルブレヒトはこの権力を得ようと心から願いました。問題は、カトリックの規定によれば、一人の司教は一つの教区しか持つことができないということでした。だからアルブレヒトは自分の欲深い目的を達成するために教皇を買収しなくてはなりません。そして教皇は非常に買収しやすい人でした。彼はローマのペテロ寺院の新築のためにぜひともお金が必要だったのです。買収に必要な金額はアルブレヒトの財力をはるかに越える金額でした。彼はお金をアウグスブルクの銀行家アントン・フッカーから借りねばなりません。そして借金を返済するために、ヴァティカンに免罪符を売る権利を求めました。教皇はこの機会を利用し、収入の半分を自分にくれるように要求しました。残りの半分でアルブレヒトは自分の負債を返済できたのです。

ルターはロイコレアで教えただけではありません。それと同時に市内の教会で説教もし、告解では牧師として働きました。告解を引き受けるときにははっきりと分かったのですが、ヴィッテンベルクの市民はイエス・キリストによる罪の赦しを信じるよりも、免罪符の方を信頼していたのです。「あなたは自分の罪を悔い改めますか」という質問に対して、多くの人たちは「私にはその必要はありません」と答えて、ルターに免罪符を見せたのでした。ルターはびっくりしてしまいました。

ルターは罪の赦しについて学問的な討論を希望していました。彼がそのために準備した95箇条提題について議論することを望んでいました。すでに第1提題が、カトリック教会の罪の赦しの本質全体に対する正面からの攻撃だったのです。

これより1年前、ロッテルダムのエラスムスが最初の新約聖書をギリシャ語の原本と共に編集していました。それで、イエスによるなら悔い改めは、ラテン語聖書のヴルガタやカトリック教会の主張するように、罪の償いを支払うということではなく、全生活をもって神に方向転換することだと、ルターは知っていたのです。ですから第1提題にこう定式化されています、「わたしたちの主であり教師であるイエス・キリストが<悔い改めよ>等と言われるとき（マタイ4章17節）、彼が意図したことは、信仰者の生活全体が悔い改めであるべきだということである。」（注8）

彼は95箇条提題と討論会への招待状をアルブレヒト大司教と他の司教や神学者たちに送りました。そしておそらく、この提題と招待状は1517年10月31日に、1507年以来大学チャペルおよび大講義室として使われていた、城

の教会の扉に張り出されました。（注9）

ルターの発議は全く失敗したように見えました。手紙の受領者の誰一人として返事をよこさず、討論会も行われませんでした。2週間ほど静かでした。しかしその後、大きな嵐が起こったのです。ルターはこの提題を友人たちにも送ったのです。彼らはその衝撃的な意義を認め、これを数千部印刷して、ドイツ全体に広めたのです。一夜にしてルターはドイツ全体に知られるようになりました。ただ教会指導者たちのみが、どんな巨大な問題が自分たちに起こって来るかを知らませんでした。当初は、一方がルターとアウグスティノ会、他方がテツェルとドミニコ会という、この2つの修道会グループの抗争だろうと考えられていました。ヴァティカンはアウグスティノ会に、ルター問題を内部問題として処理するように求めました。

そして、ルターに同情的な司教は密かにルターの批判を喜んでいましたし、長い間ルターに対して何の反対もしませんでした。それは、アルブレヒトの免罪符が自分には何らの儲けももたらさずことなく自分の教区に導入されたことに不満だったからです。

1518年の春、アウグスティノ会の総会がハイデルベルクで開かれました。ルターはこれをハイデルベルク大学の有名な教授たちとの討論の機会にしました。この討論会はルターにとって大成功でした。二、三人の教授はルターの側につきました。

アウグスティノ会はルター問題を解決できなかったの、ヴァティカンは1518年7月にルターをローマに招待しました。彼がローマへ行き、そこで自分の発言を撤回しないなら、必ず異端として処刑されることになるでしょう。ルターの守護者である選帝侯フリードリッヒ賢王は自分の有名なルター教授を失いたくなかったので、彼の予備審問をドイツで行うよう要求しました。そこで10月にアウグスブルクの国会でそれが行われました。異端として断罪される危険があったにもかかわらず、ルターは、教皇の使者カエタヌス枢機卿が95箇条提題を撤回するようにもとめた要求を拒否しました。逮捕される危険から逃れるために、彼は夜のうちに霧にまぎれて町から脱失しました。

ルターの最も手ごわい論敵はインゴールシュタット出身の神学教授ヨハネス・エックでした（注10）。1519年の夏にライプツィヒで両者が対決しました。ライプツィヒ討論においてルターはエックから窮地に落とされ、カトリック教会への批判を先鋭化せざるを得なくなりました。ルターは幾つか点で、すでにジョン・ウィックリフやヤン・フスが表明したのと同じ批判を行いました。二人とも異端として断罪されたので、これ以後ルターは命を狙われる恐れがありました。ライプツィヒでルターが述べたことは、教皇や宗教会議は誤謬を犯しえるということ、また聖書こそが教会の最高権威であるべきだということでした。これは、教皇に最高権威あり、聖

書解釈の最高の権利があるという、カトリック的な伝統と激しい摩擦を引き起こしました。

カトリック的階級主義へのルターへの攻撃はより一層鋭くなって行きました。それと同時に自分自身の神学を展開して行きました。1520年に最も重要な3つの著作を出版しました。

『ドイツ国民のキリスト教貴族に告ぐ』

『教会のバビロン捕囚について』

『キリスト者の自由について』

『貴族』の著書においてルターは教会の中の僧侶中心主義と階級主義を批判しました。そして彼は一年もたたないうちに「全ての信徒の万人祭司制」という概念を使いました(注11)。ルターによれば全ての信徒は自分で聖書を理解することができるのであって、司教の助けなど必要としません。しかし正しい理解は実際には非常に難しいことなので、聖書解釈のために解釈学的な規則を示さねばなりません。聖書の意味が開示できるような、単純で誰にでも理解しやすい鍵が必要でした。ルターは直ちにそのような数々の原理を展開しました。ルターによれば、聖書には中核となる教え、中心があります。この中心から聖書の全巻、全節を理解しなければなりません。ルターによるなら聖書の中心は、イエス・キリストにおける神によって罪人を義とする喜ばしい使信、すなわち義認論なのです。

この中心にルターは三つの「ノミ」を掲げました。

・「恩寵ノミ」、すなわち人間はただ恩寵によるのみ救われます。

・「信仰ノミ」、すなわち人間はその行為によってではなく、ただ信仰によるのみ天国へ行くのであります。この信仰は人間の行為ではなく、神からの賜物なのです。すなわち、誰も自分自身の力によってはイエスを信じることは出来ません。イエス・キリストを信じることは神の恩寵なのです。

・「キリストノミ」、すなわちただイエス・キリストによるのみ人間は救われることができます。その他の何ものにも救いはありません。

・以上の三つに続いて四番目の「ノミ」として、「聖書ノミ」があります。すなわち神の意志はただ聖書を通してのみ知ることが出来るのであって、後代の教会の伝統は他の宗教的伝統を通してではありません。

1520年6月、教皇はルターの教説が異端だと表明し、60日以内にその教説を撤回するように求めました(注12)。ルターが、破門すると脅迫する教皇の大勅書を受け取ったときは、すでに10月末でした。期限はもう過ぎていたのです。1521年1月にルターは破門され、彼の著作物は公衆の前で焚書処分されました(注13)。ルターがこれを聞いたとき、彼は自分でヴィッテンベルクの門の前で小さな火を燃やし、大勅書を焼いてしまいました。

ルターが教会から追放されたので、今度は国外追放という国家の布告がなされなくてはなりません。こ

れに対して今度も選帝侯フリードリッヒ賢王が助けの手を伸ばし、ルターがヴォルムスの国会の前で自分の立場を説明し、弁護することを可能にしてくれたのでした。1521年4月17日ルターは国会で尋問され、自分の教説の撤回を求められました。しかし、死ぬことになるかもしれないと知っていたにもかかわらず、次の日に撤回を拒否し、後に有名になった言葉ですが、こう述べました、「私の良心は神の言葉に捕らえられました。良心に反して何かをすることは危険であり、不可能ですから、私は撤回できませんし、またする意志もありません。神よ、助け給え、アーメン」(注14)。

皇帝カール5世は、ルターをヴォルムスで逮捕させないと、約束しました。ルターは急いでヴォルムスから脱出しました。今や彼は法の保護がありません、つまり誰でも彼を殺しても罰せられないのです(注15)。ヴィッテンベルクへの帰る途中、ルターはフリードリッヒ賢王の指示によって友人たちにヴァルトブルクに連れて行かれたのでした。

そこでルターは修道服を脱ぎ、髪を洗い、自らをユンカー・イエルクと名乗りました(注16)。間もなくルターに会った人は誰も、自分が誰に会ったのか分からなくなりました。さしあたりルターは安全でした。

ヴァルトブルクでルターは、大抵は一人で新約聖書をギリシャ語の原文からドイツ語に翻訳しました。そのために11週間かかりました。新約聖書は1522年9月に出版されましたが、直ちにベストセラーになりました(注17)。

1522年初頭、ルターの留守中にヴィッテンベルクで暴動が起きました。農民たちが教会内の宗教画を壊し、宗教改革を封じようとしたカトリックの司祭に乱暴したのです。ルターは宗教画の破壊も暴力的な改革も否定しました。手紙による警告が効果なしに終わったので、1522年3月6日にヴィッテンベルクに帰りました。毎日の説教の呼びかけを通してようやく秩序と静けさが戻ったのでした。

ルターは他の学者たちと一緒に、旧約聖書をヘブライ語から翻訳しました。その部分訳の最初の部は1523年に出版されました。1525年までに新約聖書と旧約聖書一部の公式の改版を22回、増版を110回ほど行いました。その結果、識字能力のあるドイツ人全体の三分の一が聖書の部分発行を所有することになりました。

1525年に農民戦争が起きました。ルターは、抑圧の廃止を求める農民の側に立ちました。しかしルターは、彼らが武器をもって要求を貫徹しようとすることに反対しました。だから戦争が起こったとき、ルターは反乱を力でもって抑えつけることを求めました。農民たちは血にまみれた暴力によって虐殺されました。それによって多くの人々が困惑しつつルターから離れて行きました。

農民戦争のさなかルターは1525年6月かつて修道女だったカタリーナ・フォン・ボラと結婚しました(注

18)。カタリーナは、ルターが1年前に贈与されたアウグスティノ修道院を再び秩序あるものとし、学生や客人に部屋を貸し、また大規模な家計を上手に取り仕切りました。彼女が作ったビールが有名になったのです。

しかし1527年からルターの健康状態は悪化していききました。肉体的なまた心理的な負担がのしかかってきました。膨大な仕事量と並んで、1522年以来、宗教改革運動の内部で様々な対立が起こってきました。最も重要なものは、ミュンツァーやボーデンシュタインとの論争や数年間続いた聖餐式論争でした。マールブルク宗教論争は1529年にルター派と改革派との間で、聖餐式問題について行われ、不成功に終わりました(注19)。同時にルターは、自立的な教会として創設されるべきルター派教会を堅固なものとするために働かねばなりません。彼は礼典式文を編纂し、讚美歌を作曲し、大・小の信仰問答書を書き、教会視察を行いました。1534年聖書全体のドイツ語訳が完成しました。それらと並んで、幾つかの講義を行い、ヴィッテンベルクへ押し寄せてくる多くの学生の世話をしなければなりません(注20)。1535年からルターは神学部の部長になりました。仕事にはきりがありませんが、体力は衰えていきます。1546年2月28日、誕生した町のアイスレーベンを訪問しているときに亡くなりました。

2 マルティン・ルターの宗教改革精神

マルティン・ルターの神学思想を語ろうとするなら、その生涯の時代区分を二つに分けねばなりません。宗教改革の発見の前と後です。その際、前期を単に否定的のみ受け取ってはなりません。この期の経験や思索は宗教改革的発見への道を開いており、まさしく必要な準備の歩みであったのです。

ルターの宗教改革の精神の中心とは何でしょうか。聖書を最高権威とするという聖書の価値を評価したことでしょうか。教会の主権要求と階級制度への批判的態度でしょうか。神の恩寵への憧れでしょうか。自由の探求でしょうか。個人的な良心の強調でしょうか。皇帝支配や教皇支配から解放されたドイツの在り方への願望でしょうか。人々が互いに兄弟姉妹の愛をもって助け合い、共に支えあうようなキリスト教社会を夢見たことでしょうか。このような提案はすでになされ、それぞれが独自のルター解釈を導き出しました。

宗教改革のこれまでの100年毎の記念祭では、カトリック教会からの区別と真の教会としてのプロテスタント自身の独自性強調とが重要でした。19世紀においては宗教改革の意味についての関心は、国民意識の成立についてであり、また社会歴史や経済史としての宗教改革の意味を問題にしました。これらの解釈においてルターはある時にはドイツ民族の道備えをした人物、またある時には福祉社会の父とされました。

400年記念祭以来、状況は劇的に変化しました。その間にカトリック教会はルターを発見し、宗教改革の要求を実行し始めたのです。450年以後にはルターの宗教改革の要求はカトリック教会によってついに取り上げられたのです。1960年代には第2ヴァチカン会議と共にカトリック教会の宗教改革が始まりました。礼典の改革はすでにほとんど完全に実行されたのです。1999年には義認論が広く受け入れられました。そして現在のカトリック教会の首長は自らをローマの司教と言っていますが、これは宗教改革者が求めていたことだったのです。さらに幾つかの重要な改革が必要ですが、しかし今日すでに、プロテスタント教会がカトリック教会を拒否したり、間違った教会だと評したりする権利は、もうありません。カトリック教会は正しい道を歩んでおり、その歩みを継続するようにプロテスタント教会は励まされねばなりません。

このような変化の故に、今日ではキリスト教会全体にとってルターの超教派意味が強調されています。ルターの宗教改革はプロテスタント内部にとってのみ意味があるのではなく、全ての教会にとって意味があるのです。さらにそれ以上です。つまり、宗教改革は教会のみでなく、全世界をも変化させたということ、私たちは知っています。しかも、これはアジアにまでも及ぶのです。そして最後的には、この福岡女学院大学の創立も宗教改革の間接的な実りなのです。宗教改革と教育とは最初からつながっていました。

宗教改革が強調したことは、神の意志は聖書において見出すことが出来る、また各人は聖書を理解することが出来るということです。従って各人が聖書を必要とします。そして、読むことを習わねばなりません。ルターの時代には文字を読めない人が90%以上でした。ですから、ルターはあちこちに学校を作らせました。最善のことは、聖書を原語で読むことです。なぜなら、ドイツ語への翻訳はどれも一つの解釈だからです。そこでルターはラテン語学校を作り、そこでギリシャ語とヘブライ語をも習うことができるようにしました。全ての人がこれらの難しい言語を習うことが出来ないのも、ルターは聖書をドイツ語に翻訳したのです。牧師たちのためには彼は神学教育の改革を行い、牧師教育を高い水準にまで導きました。だからドイツでは今日まで、牧師のことを神学者とも呼んでいます。このルターの教育プログラムが配慮したのは、プロテスタント信者たちは19世紀に至るまでカトリック信徒よりもずっと高い教育を身に着けることでした。他の宗教改革者たちもルターと同様に、教育に大きな価値を置いていました。そうですから、韓国ではプロテスタント信者はかろうじて国民の20%ですが、国会議員は25%なのです。プロテスタント主義は人々を訓練し教育するのです。プロテスタントの宣教師が来るところには、どこでも学校が作られます。日本でもそうなのです。

プロテスタント主義は教養ある自覚的な人間を求めます、他の人に管理されて、それに盲従するような人間で

はありません。そのことをルターにおいて良く知ることが出来ます。彼は大変に勉強し、熟考し、そして認識したことを大声で公表し、あらゆる障害に立ち向かいました。彼は、権威に無条件に従うような儒教徒ではありませんでした。彼は自分の提題に疑問を呈することを、いつでも受け止める用意をしていました。彼はしかし不正や虚偽には黙ってなくて、口を開きプロテストしました。そこからプロテスタントという名が生まれました。信じること、また嘘と暴力にプロテストすること、を告白するのです。

ルターはこれによって個人の責任を強調しました。これは後に啓蒙主義を導きだしました。教会が啓蒙主義を望んだわけではありません。そうではなく、教会は長い間啓蒙主義を警戒してきました、しかしルターの個人の責任の強調は啓蒙主義への地平を開いたのです。そしてルターは神の前での個人の価値を強調したことによって、彼は人権の定式化の前提を作ったのです。そしてそこから民主主義は遠く離れてはいません。宗教改革なしには、民主主義への入り口は無かったことでしょう。ルター自身は政治的には保守的でした。彼は皇帝に満足はしていませんでしたが、君主制を疑問視はしていなかったということは、確かにルターが選帝侯フリードリッヒ賢王と良い関係を持っていた経験と関係しています。しかし全体的に見るなら、宗教改革は民主主義に道を開いたのです。

広範囲な影響の一例は音楽です。中世では礼拝中の楽器の使用は禁止されており、ア・カペラの歌唱は聖職者や聖歌隊によって歌われる典礼歌に限られていました。ツヴィングリはカトリック的伝統に従って、どんな形の会衆賛美も拒否しました。カルヴァンは確かに簡素な聖書テキストの歌を許しましたが、しかし楽器による伴奏を禁じました。それに対してルターは、会衆が礼拝に参加することを強く求め、会衆賛美を導入しました。ルター無しには、今日私たちが知っているような教会音楽は無かったでしょう。クリスマス・オラトリオも（バッハの）マタイ受難曲もモーツァルトのレクイエムも無かったでしょう。オルガン音楽も豊かに発達しなかったでしょうし、西洋古典音楽も本質的に貧しいものになっていたことでしょう。

これらの例は、ルターと宗教改革が教会を変革したのみでなく、社会全体を変革したことを示しています。宗教改革の影響はドイツのみに限られず、ヨーロッパ全体に及び、そしてヨーロッパから世界全体に広がりました。宗教改革はグローバルな影響を与え、世界市民となり、世界文化遺産となりました。

では、この世界変革的は運動の背後にある原動力は何なのでしょう。ルターの宗教改革はどういう泉から水を汲んでいるのでしょうか。

宗教改革はルターの魂の困窮と、内面的平和への宗教的探究から始まっています。ルターは自分の個人的疑問

に対する当時の宗教の答えに疑いをもちました。ルターは、人々を落ち着かせようと考え出された教会で、丸め込まれはしませんでした。ルターにとっては真理が大切でした。彼は根源まで物事を突き止めたかったのです。自分がまだ平安を持っていないとしたら、どうして平安を見いだせるでしょうか。自分が不安を持つ十分な理由があると頭が言うとき、どうして不安を克服できるでしょうか。

ルターは、自分がありたいようには、またあらねばならないようには、あることができないことを知っていました。このあるべきことは、キリスト教においては神の要求だと理解されました。聖書は、人間は神の意志に従って生きるべきだと教えます。そして私たちは神の意志を神の命令によって知ることができます。根本的なものは十戒です。

十戒は、人間が神と隣人を愛し、正義を行い、真理の内に生きることを要求しています。

この戒めは断定的であり、従って全体的です。戒めの一つに「汝、盗むなかれ！」とうのがあります。しかし、これはどのように守るべきでしょうか。本当に盗まないかどうか、たとえそう努力しても、全く確かではあり得ません。自動車を運転しているとき、他の人から新鮮な空気を盗んでいないでしょうか。仕事についているとき、他の人から仕事を盗んでいないでしょうか。安いコーヒーやバナナを買うとき、収穫労働者から正当な賃金を盗んでいないでしょうか。

戒めを守ることが出来るように、旧約聖書には多くの小さな律法があって、神の戒めを守るために何をなすべきかを具体的に記述しています。旧約聖書を読む人は誰でも、多くの戒めが人生を束縛していると思います。しかし、反対なのです。多くの戒めは簡単にするためのものだと理解すべきです。多くの異なる命令を守ることは難しいことです。しかし、可能です。旧約聖書の教えによると、多くの小さな律法は戒めを守る人は、十戒を守っているのです。

しかし問題は、イエスが十戒を・・・旧約聖書とは違った仕方で・・・徹底化して、戒めを守ることを事実上不可能としたことです。例えば、ある男が魅力的な女性を見て、彼女と寝たらどんなに素晴らしいだろうと考えるなら、イエスの律法解釈では、その男はすでに姦淫を犯しているのです。すなわち、間違った考えがもう律法違反なのです。しかしどんな人間も自分の考えをコントロールすることは出来ません。考えは、遅くとも夢においては、気ままに行ったり来たりするものです。

それにもかかわらず、イエスは私たちが神の戒めを守るように求めます。そのためにはしかし、人間は他の人間にならねばなりません。今のような私たちには、十戒をイエスの言う意味で守ことは出来ません。従ってイエスは私たちが違ったようになることを、つまり新しい被造物になることを望んでおられるのです。換言すれば、

人間はまだあるべき人間、あるであろう様な人間ではないのです。まだ、真の人間ではないのです。私たちは先ず、そうならねばなりません。真の人間が初めて神の戒めを守ることが出来るのです。

ルターはイエスを大変厳密に理解しました。ルターによれば、律法は人間から善い行為を求めます、しかし人間にはそれが出来ません。つまり、律法は人間を狭さの中に追いやり、自分の失敗を、キリスト教的に言えば、自分自身の罪を認めるように強要します。神の戒めが私に言うことは、私はあるべき私ではあり得ないということです。しかしこれは恐るべき状況です。厳密に熟考する人は、自分が失敗して、神の罰を受けることを知るのでした。

報いで受ける罰から逃れるために、ルターは本当にあらゆることを試みました。他の誰もしたことがないように、神の意志に従って生きようと努力しました。彼は自分のキャリアを放棄しました。自分の豊かな生活を断念したのです。自由を放棄して、僧侶になったのです。そして僧侶として3時間毎に勉強を中止して、祈りを捧げたのです。そのために睡眠をも減らしました。毎日多くの時間をさいて、長い時間お祈りをしました。

外見上は、ルターは模範的な敬虔な生活を送りました。しかし彼は感覚の鋭い良心を持っていました。自分自身をあざむけなかったのです。自分の考えがまだ十分には明確でないと気付いていました。愛すべきはずの神にいつも不安をもっていることに気づいていました。そして彼は認めざるを得なかったのですが、神に対して元々怒っていたのです。それは、自分がなり得るはずのない者になるべきだという、見通しのきかない場所に、神は自分を連れて行った、ということなのです。

宗教上の教師たちの答えは単純で彼を落ち着かせることは出来ませんでした。聖書は、神が義なる方であると、いかに端的に述べているのでしょうか。人間を解放する神は、一体、何処で不義なる暴君なのでありましょうか。

このような困窮の中で彼は、神の義が何を意味しているかを聖書の中で厳密に探り始めました。そしてその際に確信したのですが、神の義はカトリック教会の教えたように人間から義を求めるといふ点にあるのではなく、不義なる人間を義とする点にあるのです。神の義は過ちを犯す人間を罰する点にあるのではなく、人間を罪から解放する点にあるのです。これはルターにとって信じられないほどの解放をもたらす発見でした！ルターは神の義を理解することを求め、そして神の愛を発見したのです。神は私を愛しておられる。イエスは私の罪のために死なれた。彼は私が負うべき罰を自らに負われた。彼は、私が誤ってなしたことのために、罰せられた。彼は私に代わって罰せられた。私は罪を犯したにもかかわらず、自由とされた。これが新約聖書の喜ばしい使信です。これがイエス・キリストの良き知らせです。これが十字架の言葉です。

この発見はルターにとって信じられないほどの解放でした。神は私を愛してください！イエスは私を救ってくださいました。イエスにおいて私は自由だ！ルターが発見したのですが、この解放をもたらす発見は人間を変えるのです。彼は、神の愛の発見は人間に大きな変化をもたらし、神をもはや恨むのではなく、神と隣人を愛し始める、と確信したのです。喜ばしい教えは人間を変え、不安から解放し、憎しみから癒し、自分自身から神の意志に対応することを行うような新しい被造物に作り変えるのです。イエス・キリストにおける神の愛についての嬉しい教えによって、人間は真の人間になるのです。これは、キリスト者がすでに完全であるということではありません。キリスト者は道の途中にあるのです。キリスト者であることは或る状態をいうのではなく、生成のプロセスを言うのです。真の人間になるというこの道は、全ての人に開かれています。この喜ばしい知らせは全ての人に当てはまるのであって、何処で生活していようが、今まで何を信じていようが、無関係なのです。

換言すれば、第一に考え方が変えられる、その次に人間全体が、つまり生活全体とあらゆる関係性全体が変えられるのです。

ルターはこの解放を強力なものとして理解しており、自分の名前を変えるほどで、それによって解放された人間として新しい人生を始めようとしたのでした。ルター(Luther)はもともとルダー(Luder)と言いました。宗教改革上の発見以来、自分で「ルター」と名乗り始めたのです。ルターはギリシャ語の自由民(Eleutheros)から由来しています。

誰も、神から贈られたこの自由をルターから取り上げることが出来ません。教皇も皇帝も出来ません。この自由は、死の不安よりも強いのです。

ここで私は皆さんにお尋ねしたいのですが、皆さんもそのように自由なのでしょうか？

最後に、ルターの義認論は今日の私たちにどんな意味があるのかを、論じてみたいと思います。

3 ルターの宗教改革精神の私たちの人生についての意義

私は日本のことを良くは知りません。25年以上この方、韓国に住んでいますので、そこから知っているのみです。これまで日本を3度ほどしか訪問していません。ですから、皆さんのことを本当には分かることが出来ません。しかし疑いもなく、日本にも、ドイツや韓国と同様に、問題を持った多くの人たちがいます。多く人が美顔手術を受けているということは、多くの人が自分の外見に満足していないということを示しています。ある人たちは自分をもっと若く見せたい、ある人たちはもっと美しく見せたい、またある人たちは、自分が魅力的だと思っている人と同じように見せたいと望むのです。そして、コ

スプレが好まれるのは、多くの人たちが自分本来の私を脱ぎ捨てて、他の人格を取りたいと、いうことを示しています。最近或る若い女性がコスプレについてテレビで語っていましたが、自分は衣装を取り換えることで以前よりもっと幸せを感じるというのです。

今日の私たち自身の問題は、恐らく、ルターの良心の呵責とか死後の世界への不安とかとは違った種類のものでしょう。私の知っている多くの人たちは、自分の罪の問題を排除し、自分の過ちについて認めようとしません。韓国では多くの人が、その人が悪いことをしたと明確に証明されるまでは、嘘をつきとおします。日本でもこれが問題であるように思います。

ルターはそう出来ませんでした。彼は自分に嘘がつけず、自分の良心をごまかすことが出来ませんでした。自分自身に誠実でした。彼は単純に、「全ての人間は過ちを犯すものだ」とは言いませんでした。私が何か間違いをしたら、それは元通りにされます。それが普通です。誰かが私を批判し、訴えたら、私は単純にこれを否定するのです。他の人たちもやはりそうします。しかしルターはそう簡単には出来ませんでした。嘘をつくのは悪いと知っていました。たとえ皆が悪いことをしていたとしても、悪いことをすることは良くないということ、彼は知っていました。ルターは、嘘は足が早いことを知っていました。いつか真理が出てくるのです。いずれにせよ神の前では。

人が自分を実際よりもより良く見せようという理由は、自分の名誉を失いたくないからであり、人々に受け入れられたいからであり、愛されたいからであります。良い人間だと思われたいからです。ルターは、私たちが間違いを犯しても、神はなお私たちを愛してくださると、いうことを知っていました。神は私たちを条件なしに愛しておられます。私たちはあるがままの自分以上のものであるべきではありません。そして私たちは、実際の自分よりもっと良いかのように、振る舞うべきではありません。私たちは弱くてもかまわないのです。

このことを知っている人が初めて、魂が健康になります。これを知っている人が初めて、嘘をつかなくなります。これを理解した人が初めて、自分自身についての真実に耐えることが出来ます。神は、あるがままの私を、私の弱さと共に、愛しておられます。この真理が自由になります。ですから、キリスト者は自分の罪を認めるのです。神はそれにもかかわらず愛しておられると、知っているからです。キリスト者は自分の罪を認めることに不安はありません、何故なら他のキリスト者たちもこれを理解していると知っているからです。誠実に自分の罪を認めるなら、他の人たちも自分の誤りを知っており、従って裁くのではなく許すのだ、ということを知っているのです。しかしキリスト者は、人々が自分たちを実際よりもより良く見せようとするなら、失望するでしょう。罪が明らかなのに、自分の罪を消そうとしたり否定したり

しようとするなら、これには耐えられないのです。

嘘をつく人は、現実と一致していません。現実を捻じ曲げているのです。その人は好きなように自分の世界を作り上げているのです。もちろん各人は現実についての自分の像を描きはします。しかし私の世界が現実から離れすぎているなら、それは狂っています。明確な罪を認めないのは、狂っています。私は確信しますが、神の赦しの愛を知らない人は狂わざるを得なくなるでしょう、というのは現実に耐えられなくなるからです。自分自身についての真実に耐えられないからです。確信していますが、マルティン・ルターが知ったことを知る時に初めて、人は健康になるのです。それは、神は私たち罪人を愛している、ということです。換言すれば、イエス・キリストを信じる時に、人は初めて魂が健康になり、幸福に、自由になるのだと思います。ですから、キリスト者は繰り返し、イエス・キリストが愛し、癒し、解放するということを強調するのです。

最後にルターの宗教改革上の認識を一つの例をもったお話ししましょう。ドイツにはアジアにもあるような、壁面の広告がありますが、また広告塔もあります。それは丸い柱で、直径が約1メートル位、高さが約2メートル半位あります。それを広場に立てて、広告をあらゆる側面から見られるようにします。

この広告塔で起こった短い物語をお話ししましょう。

或る夜、酔っ払いの男が暗い中を家に向かってよろけながら歩いていました。突然、高い壁のようなものが彼の行く手を塞ぎました。彼は両手で壁を突っ張りました。正しく触ることが出来なかったので、壁の端っこまで行こうとしました。しかし行っても、行っても、壁は終わらないです。そこでこの男は逆方向に歩み出しました。しかし行っても、行っても、ここでも同じでした。壁に終わりが無いのです。長い空しい努力の後でこの男はついに立ち止まり、そしてこう言いました、「畜生、俺は壁に閉じ込められてしまった！」と。

これはおかしいお話です。しかし一つの真面目な側面をも持っています。私たち人間の実存について語っています。酔っ払い男のように私たちは暗い中を歩いています。そしてこの男のように私たちは世界をはっきりとは見ていません、むしろ現実についてのおぼろげな像を見ているのみです。そしてその時、私たちは捕らえられているということを経験するのです。

仏教において教えられていることですが、人が集中的に瞑想しているとやがて壁に穴を発見する、また人が悟りを開くと本当は壁など無かったということが分かる、ということです。私たちが生きている現実世界は私たち自身の頭の中にあるのであって、本当の現実性とは何の関係もない、ということです。認識論的にはこれは正しい。私たちは皆自分で、現実についての像を作るのです。しかし、これは何と困難で、時間のかかる道なのでしょうか。

キリスト教ははるかに簡単な道を提示します。仏教徒

とは違ってキリスト者は、壁は単なる幻想ではない、と言います。キリスト者は、私たちが知覚する現実が事実存在するということから出発します、ただ私たちはそれを間違っていて見ており、間違っていて理解しているのです。あのお話しの酔っ払い男のように、私たちは一方向のみに凝り固まっており、自分自身の観点によって縛られているのです。

イエスはその公の働きを、悔い改めへの呼びかけと共に開始しました。「悔い改めよ、神の国は近づいた！」換言すれば、「神の現臨において、あなたがたの視点と生き方を変えよ！」、「神が自由を与えてくださったのだから、あなたがたは観方を変えることができる！」、という呼びかけです。

あの酔っ払い男はただ向きを変えねばならないのです。そうすれば壁が彼をさえぎったのではなく、彼は自由だということが分かったでしょう。イエスが悔い改めを求めた時、彼はこの方向転換を意味していたのです。自分自身の限界によって、自分の硬直した世界観によって捕えられてはいけないのです！

キリスト者は、壁は実際に存在する、罪は現実である、ということを知っています。私たちは罪人である、しかし罪は私たちを捕捉すべきではない、のです。イエスに向かって悔い改める人は、罪にもかかわらず自由なのです。罪は残りますが、しかし私たちが充実した幸福な人生を送ることを、もしくは、あのお話しの言葉で言えば、帰宅する道を見つけることを、妨げることは出来ません。

私は皆さまが自由を発見し、幸福への道が発見されるようにと希望します。

私が皆さまの好奇心をかき立て、マルティン・ルターについて、また彼が納得させようとしたことについて、もっと知りたいと思われたなら、私のこの講演は成功したことになりました。

しかし私にはもう少し大きな願いがあります。それは、「イエスはあなたを愛している」という言葉を初歩的な無駄話として退けるのではなく、この背後にどんな深い知恵が隠されているかを、知ってもらいたいのであります。

注

- (1) WA TR 4, 440, 9-10.
- (2) 1524年選帝侯フリードリッヒ賢王は修道院をルターに個人の家として与えました。それ故に今日、「ルターの家」と呼ばれています。
- (3) WA TR 2, 177, 8-9.
- (4) Bernhard Lohse, *Luthers Theologie in ihrer historischen Entwicklung und in ihrem systematischen Zusammenhang*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1995, 99. Bernhard Lohse (editor), *Der Durchbruch der reformatorischen Erkenntnis bei Luther*. Neuere Untersuchungen, Wiesbaden: Steiner 1988.
- (5) 参照、ルターの1517年9月4日付け「スコラ神学への駁

論」のための97命題。(参照、WA 1, 224-228)

- (6) 参照、Marcel Nieden, *Die Erfindung des Theologen*, Tübingen. Mohr 2006, 43-45.
- (7) ローマ教皇は最後の聖年が2015年12月8日から2016年11月20日までと発表しました。
- (8) WA 1, 233, 10-11.
- (9) Vgl. Ott, Joachim/Treu, Martin (Hg.), *Luthers Thesenanschlag – Faktum oder Fiktion*, Leipzig (Schriften der Stiftung Luthergedenksstätten in Sachsen-Anhalt, Bd. 9) 2008; die Historizität befuertworten z.B. Heinrich Bornkamm, *Thesen und Thesenanschlag Luthers: Geschehen und Bedeutung*. Berlin: Töpelmann 1967); Kurt Aland, *Die Reformatoren: Luther, Melanchthon, Zwingli, Calvin, 4.*, neubearbeitete Auflage, Guetersloh: Gütersloher Verlagshaus 1986; Thomas Kaufmann, *Geschichte der Reformation*, Frankfurt/Leipzig: Verlag der Weltreligionen 2009, 182-197; Joerg Lauster, *Die Verzauberung der Welt. Eine Kulturgeschichte des Christentums*, 4. Auflage, Muenchen: C.H. Beck 2016, 298.
- (10) インゴルシュタット大学は1472年に創立され、1826年にミュンヘンに移転されました。1802年以来ルドヴィッヒ・マキシミアニス大学と呼ばれています。
- (11) WA 8, 488,7. (“das gemeyn aller Christen priesterhum”).
- (12) 異端だと脅す大勅書は「Exsurge Domine」と題されて1520年6月15日に出されました。
- (13) 1521年1月3日の大勅書によって異端認定が成立しました。
- (14) Julius Koestlin, *Luthers Rede in Worms am 18. April 1521*, Halle: Verlag der Buchhandlung des Waisenhauses 1874, 8-9 (Spalatin Bericht). 「わたしはここに立つ、これと違ったことはできない、神よ、助け給え、アーメン」という言葉は歴史的には証拠はなく、後代の付加であります。
- (15) ルターへのヴォルムスの勅令は1521年5月26日に出されました。
- (16) 聖ゲオルク (イェルク) にルターは子供のころから特別な関係を持っていました。
- (17) 新約聖書はグーテンベルク聖書のわずか4%の価格でした。それでようやく一般市民も聖書を購入することが出来ました。
- (18) 彼女は1499年生まれ、1552年に亡くなりました。ルターとの間に6人の子供(息子3人、娘3人)を授かりました。
- (19) 聖餐式問題を除いては様々な宗教改革者たちは全ての点で考え方は一致していました。聖餐式に関してはルター派教会と改革派教会の一致は見られませんでした。聖餐式問題はようやく1973年になって解決したのでした(ロイエンベルク協定)。
- (20) ルターとメランヒトンによってロイコレアにはこの年、ヨーロッパの大学で最多の学生が集まりました。

*本稿は、2018年2月3日にギール記念講堂にて、福岡女学院大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻・福岡女学院大学臨床心理センター・福岡女学院大学ポジティブ心理学研究所の共同主催によって行われた、ルター宗教改革500周年記念国際交流講演会「ルターの宗教改革精神と心の回復」(講師:マルテ・リノ教授)の講演録を訳したものである。

